

當時支那ニ於テヘ第二編「支那ノ原因」ニ於テ述ベシ如ク抗

日思想全國ニ瀰漫シ特ニ北支ニ於テ甚ダシク冀察政權ノ隸下

ニ在ル第二十九軍ノ如キヘ下級幹部以下ニ徹底的ニ抗日思想
浸潤シアリ又支那中央部ニ於テヘ蔣介石及其ノ側近要路者中
ニ強烈ナル抗日思想ヲ懷キ對日一戰敢テ辭セズト爲ス者渺々
ラザル狀況ニ在リ

第一章 對支情勢判斷

第一節 事變初期ノ情勢判斷

事變勃發直
後ノ判斷

昭和十二年七月七日夜蘆溝橋事件勃發シ支那軍我ニ挑戰スル
ノ報ニ接スルヤ七月八日我ガ中央統帥部ハ「一般方針ヲ決セリ
許メ擴大ヲ防止スルヲ要ス」ノ一般方針ヲ決セリ
然ルニ翌九日ニ至ルモ支那軍ノ無統制ナル挑戰的行爲止マサ
ルニ鑑ミ我ガ中央統帥部ハ「我ヨリ進ンデ事件ヲ擴大セザル
モ彼ヨリ戰ヲ挑ムニ至ラバ之ヲ撃滅ス」ノ方針ヲ採レリ但シ
此ノ場合ニ於テモ事件ヲ成ルベク平津地方ニ限定スルニ爲ム

支那駐屯
軍ノ兵力

増強ノ爲
ノ判断

支那駐屯軍司令官亦事件勃發當時ヨリ不擴大方針ヲ以テ極力
和平解決ニ努力セシガ十日ニ至ルモ支那軍ハ執拗ニ我ガ軍ニ
挑戦シ專横ノ推移スル所駐屯軍ハ優勢ナル支那軍ノ重體ニ諸
ルノ危險ノ十處アルヲ以テ中央統帥部々ハ兵力増強ニ關シ左
ノ判断ヲ爲セリ

一 諸情報ヲ綜合スルニ冀察當局及南京政府ハ國民ノ抗日意識
ヲ煽揚スルト共ニ對日武力戰爭ヲ準備シツツアリテ我ガ支
那駐屯軍ノ和平解決ノ努力ハ支那側ノ暴涙ナル挑戦的態度
ニ依リ酬イラレ事態ハ逐次悪化スルノ處大ナリ
二 大規模ナル對支出兵ハ帝國ノ固ヨリ好み所ニアラザルモ狀
況斯クノ如クニシテ機ヲ失セんカ支那駐屯軍ノ自衛行動ハ
優勢ナル支那軍ノ重圍ニ陥リ遂ニ救フベカラザルニ至ル斯
クテ帝國ノ威信ハ地ニ墜チ支那ヲシテ益々增長セシメ在留
帝國臣民ノ生命財産ハ暴虐ナル毒手ニ委スルニ至ルベシ故

ニ速力ニ之ヲ救援スルト共ニ事態ノ根元ヲ一掃スル爲必

ナル兵力ヲ先ツ北支方面ニ派遣スルヲ要ス
三、事態更ニ他方面ニ擴大スルヘ之ヲ欲セザル所ナルモ支那全
般ノ抗日情勢ニ鑑ミ他方面ニ於ケル日支尖銳化ヲ來ス處ナ
キニアラズ之ガ爲在支居留民ノ保護ニ關シテハ遺憾ナキヲ

期ス

四、以上ノ處置ヲ取ル場合ニ於テモ現下ノ國際情勢ハ歐米就中

蘇聯邦ノ參戰ヲ誘發スルノ虞憂ナシト判斷セラル

右判断ニ據リ支那駐屯軍ニ左ノ如ク兵力増派ヲ決定ス
一、關東軍ヨリ一部獨立混成第一、第十一旅團、關東軍飛行集
團ノ一部（偵察、戰闘、重爆各二中隊）他

二、朝鮮軍ヨリ上都應急動員セル第二十師團及飛行

三、内地ヨリ師團三、飛行中隊十八（偵察六、戰闘五及其他
然ルニ冀察健へ十二日午後七時至リ我方要求近永定河左岸駐屯

障、禁止、將來ニ關スル所要ノ保ヲ受諾セルヲ以テ内地ヨリス

ル師團等ノ派遣ヘ一時之ヲ見合セ僅力ニ關東軍・朝鮮軍ノ各一部及航空兵團等ヲ派遣スルニ定ム但シ内地及朝鮮ヨリ派遣スル航空兵團ハ南滿洲ニ位置シ中央ノ直轄タラシム

以上ノ如ク十一日支那側トハ交渉成立セルモ支那駐屯軍ハ冀察側フシテ今次ノ協定ヲ具現セシメシガ爲ニハ必要ニ應シ兵力ヲ行使スルコトアルヲ豫期シ十二日所要ノ計畫ヲ樹立セリ

然ルニ七月十五日迄ニ瀋海線以北山西省境以東ノ地區ニ集結セル支那側兵力ハ平時兵力ヲ合シ約三十師ニ達シ又平津地方ニ於テハ十一日ノ協定以後ニ於テモ諸所ニ不祥事件續發セリ

是ニ於テ中央統帥部ハ左ノ如ク最後の通牒ノ交付及之ヲ解フ緊急處置ヲ爲スニ決ス

協定後支那
電報ノ判断

斯ク事態ヲ此ノ機ニ放任スルトキハ支那側ノ遷延策ニ致
サルル危険アルヲ以テ之ヲ防止シ且動員出兵ノ時期ヲ誤ラ
ラザル爲我ガ最小限ノ要求事項ノ履行トザルトキハ我ガ
軍ヘ現地交渉ヲ打切り第二十九軍ヲ膺懸ス之ガ爲期限満
了時期ニ所要ノ内地騒動ニ動員ヲ下令シ北支ニ派遣ス又
南京政府ニ對シテハ日本ハ飽ク迄現地解決ヲ圖リ地域ヲ
北支ニ限定スル意圖ナルヲ以テ南京政府ハ中央軍ヲ舊態
ニ復シ對日挑戦的行動ヲ中止シ且現地ノ解決ヲ防害セザ
ルベキヲ要求

中央統帥部ヘ七月十七日支那駐屯軍司令官ラシテ宋哲元ニ
對シ期限附回答ス擬サンムルト共ニ支那中央政府ニ對シ事
件解決ヲ妨害スルガ如キ行爲ヲ停止スペキコトヲ要求セリ
之ニ對シ宋哲元ハ十八日支那駐屯軍司令官ヲ訪問シテ遺憾
ノ意ヲ表シ十九日我ガ要求セル細目協定ヲ承認セリ
然レフモ此ノ事ニ於ケル支那中央政府ノ回答ハ誠意ノ認ム

ベキモノナカリシヲ以テ我ガ中央統帥部ヘ武力解決ノ止ムラ
得ザルニ至ルベシト爲シ支那駐屯軍司令官ニ新任務ヲ附與シ
且南滿洲ニ待機セル臨時航空兵團ヲ支那駐屯軍司令官ノ隸下
ニ入ラシムルト共ニ内地師團ノ動員、義ニ應急動員セル第二
十師團ノ本動員並ニ之ニ伴フ部隊ノ動員及此等部隊ノ北支那
派遣ヲ實施スルヲ要スト判断シ之ガ準備ニ着手セリ
然ルニ其ノ後情勢稍々緩和観察側ノ事件責任者處分第三十七
師ノ保定方面移駐開始等セシヲ以テ二十二日ニ至り動員實施ハ之ヲ延期スルコトトナ
レリ

第一節 郎坊事件後ノ情勢判断

七月十九日ノ協定ニ基キ第三十七師ノ一部ハ北平附近ヨリ保
定方面ニ移動ヲ開始セルモ其ノ主力ハ依然西苑ニ駐屯シ撤退
ノ模様ナク、而シテ七月二十五日ニ至リ事件後我ガ軍ニ續シ撃
戰的態度ヲ取ラザリシ第三十八師ニ依リ郎坊事件勃發スルニ

廣安門事件
ニ對スル軍
司令官ノ決

至レリ』駐屯軍司令官ハ郎坊事件ノ發生ヲ以テ尙未ダ武力行
使ノ決意ヲ爲サズ依然平和ニ事件ヲ解決セント欲シ隠忍善處
スル所アリシガ翌二十六日廣安門事件惹起セリ是ニ於テ駐屯

司令官ハ更ニ隱忍ヲ重ヌルハ將來ニ亘リ軍ノ任務遂行ヲ不可
能ナラシムルノミナラズ皇軍ノ威信ヲ失墜スルニ至ルベシト
判斷シ平津一帶ノ支那軍ヲ斷乎廣鐵スルニ決シ二十七日行動
ヲ開始スルコトトセリ同日中央練師部亦支那陸地軍司令官ヲ
決心ヲ是認シ且同軍ノ任務達成上必要ナル左ノ諸件ヲ處置ス
一、支那駐屯軍司令官ノ現任務北支主要各地ノ居留民ヲ保護シ
ノミヲ以テシテヘ北支那ニ於ケル時局ノ給收ヲ爲シ得ザル
ヲ以テ更ニ一層廣汎ナル新任務ヲ附與ス
二、支那駐屯軍現在ノ兵力ヲ以テシテヘ應急ノ處置ヘ之ヲ講ジ
得ベキモ大ナル戰果ヲ收メンガ爲ニハ兵力不足ナルヲ以テ
内地ヨリ三師團及之ニ伴フ部隊ヲ動員シテ北支ニ派遣ス

平津地方
戦後ノ方略
判断

七月下旬支那駐屯軍一度行動ヲ開始スルヤ平津地方ノ第二十九軍ヲ驅逐シ續イテ長辛店等地及天津附近ヲ確保シ平津地方ノ支那軍及不良保安隊ヲ掃蕩シ主要都市ノ安定ヲ圖リ次期作戦ヲ準備ス。

八月二日中央統帥部ハ支那駐屯軍及敵軍ノ行動並ニ今後ノ戰局等ニ關シ左ノ如ク判断セリ

一、第二攻勢、主翼部隊ノ天津附近到着豫定ノ概要

八月十日前後ニ於テ應急勦罰二師團、十五乃至二十日頃迄ニ一師團並ニ前記二師團ノ充足人馬天津附近ニ到着スペタ後方部隊等ノ全部ノ天津附近奪取完了ハ八月末トナルベシ

二、支那軍ノ行動ニ對スル判断

鴻福麟軍、馮石海軍等ノ雜軍約三萬人涿州、保定間ニ在り中央軍ハ保定、石家莊間ニ約六萬、石家莊、順德間ニ約三萬、北寧河南省及平州附近瀋海沿線ニ約二十萬、徐州附近鹽海沿線ニ約五萬、計約三十四萬集中セリ

山東省ニハ高射砲ヲ主トスル若干ノ部隊濟南附近ニ到着セ

ル外未ダナル部隊ノ侵入ナキガ如シ我ガ軍ニ擊退セラレ
タリ第二十九軍中約二萬ハ禹禪軍、馮占海軍等ニ敗容セ
ラレ平漢沿線ニ退却シタルモノノ如ク又天津附近ニ在リシ
約一萬ハ馬廠^{天津南方}附近ニ退却シタルモノノ如シ而シテ
此等支那軍ヘ平漢鐵路^{井陘}ニ於テハ一擣ヲ以テ我ガ前途ヲ
禪海セシメ主力ヲ以テ中都河北省ニ於テ又津浦沿線方面ニ逼
於テハ滄州、德州附近ニ於テ相當頑強ナル抵抗ヲ爲スモノ
ト豫想セラル之方爲濰海沿線ノ部隊ヘ前方ニ増加セラルル
處大ナリ

此等支那軍ヘ我ガ軍數少ノ兵力ヲ以テ豪進スルカ又バ我ガ
軍ノ集中禪延^{スルガ如キ場合ニ}於テハ我ガ後方ノ機關^行
フト共ニ進ンテ攻勢ヲ取ルコトナキヲ保シ難シ

山東軍及察哈爾省内ニ在ル第二十九軍^{ト第百四十三師}ハ概

中立的態度ヲ保持メベタ山西及綏遠軍亦一部ヲ省境附近ニ進出セシムル等消極的對策ヘ之ヲ講ズベキモ進ンデ積極的行動ニ出ツル公算少キモノト判斷セラル

空軍ハ消極的態度ヲ採リアル天津濱海、平漢沿線ノ主要飛行場ニハ著々所要ノ準備ヲ進メアルヲ以テ中部河北省作戰ニ際シ英ノ一部ノ參戰ヲ豫期セラル

三、今後ノ戰況推移ニ關スル判断

支那駐屯軍ノ作戰地域ヲ概保有し、獨流線ノ線以北ト爲ス而シテ支那側モ亦保定附近ニ於テハ眞面目ナル抵抗ヲ爲スペク該線ニ進出セシガ爲ニハ相當激烈ナル戰鬪ヲ豫期セザルベシ、フズ支那駐屯軍司令官ハ平津地方ノ掃蕩ヲ行ヒツツ遂次到着スル增加兵團ヲ併セ適時上記ノ線ニ向ヒ前進スベク其ノ時兵力區分等ハ今後ノ情勢ニ依リ決定セラルベシ

第二章、對支作戰計畫

第一節 中央統帥部ノ作戰計畫